



A L P S CAREER

<シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第30回>

社会人大学院生の生活から 考えたこと ～自治体職員のキャリアプラン～

社会人大学院生となる契機

私は大学時代に文学部で日本史を専攻していて、一般的な大学生が就職活動をする時期に、江戸時代の古文書や明治時代の新聞記事を図書館の書庫で一日中閲覧していたような学生でした。

就職も博物館の学芸員や歴史学に関わった仕事を志望し、法学部や経済学部の学生と比べてかなりの就職難であったことは確かですが、就職先をなぜ福島県庁に決めたのか、ということについては実のところ自分自身でもあまり意識していませんでした。

その一方で、もともと社会に関する研究や分析が好きな性格ということもあり、



立岩 信明

福島県教育庁福利課
(公立学校共済組合福島支部派遣)
福島大学大学院地域政策科学研究科修士

【たていわのぶあき】1979年宮城県仙台市生まれ。東北学院大学文学部を卒業後、2003年に福島県庁入庁。相双地方振興局や相双農林事務所勤務を経て、現在は公立学校共済組合福島支部にて福利厚生事務（人間ドック・特定保健指導）を担当。

2008年4月に福島大学大学院に入学。2010年3月修了。修士（地域政策）。自治体政策研究会、自治体学会及び日本地方自治学会会員。また、日本酒サービス研究会・酒匠研究会連合会認定「きき酒師」の資格を有し、日本酒をはじめとする酒類全般の啓発と飲酒運転防止の啓発に努めている。

県職員として五年目という区切りの年に、今までの仕事（税務や農政）で感じたことや問題意識を何らかの形で文章に表現してみたいと思うようになりました。

自分で入学金と授業料を払って社会人大学院で学ぶことにしたのも、それまでの自分自身を振り返り、地方公務員としてこれから何ができるのか、という問いに答えを見つけない行つたと言えるのかもしれない。

大学院入学まで

私が入学した福島大学大学院は、社会人に広く門戸を開くというコンセプトがあつたため、昼間は仕事、夜間は大学

院というスタイルで生活が可能でした。

また、地域政策科学研究科という、地方行政に関する研究が可能な科が大学院にありましたので、迷うこと無く福島大学大学院を受験することを決めました。

入学願書提出後に、入学後の研究計画に関連する任意のテーマの小論文（二〇〇〇〇字くらい）と研究計画書を大学院に提出し、選考試験はそれに基づいた口述試験と面接でした。

私個人としては、今まで担当した仕事に関連したテーマで臨みましたので、自信を持って受験することができました。

一般的に大学院入学の選考試験は、研究を続けていき、修士論文を執筆・完成できる人物かどうかという点で選考されるものだと思います。

そういう意味では、大学院に入ること自体はそれほど重要ではなく、その先にある修士論文執筆に重点が置かれます。

大学院での生活

自信を持って受験したので、なんとか合格したいという気持ちが強かったこともあり、実際に合格通知が郵送されてきた時は、率直に嬉しいという気持ちと、再び大学機関で学べる機会が得られたというワクワク感でいっぱいであったのを覚えています。

二〇〇八年四月から始まった私の大学院生活ですが、具体的には、演習が夜六時三〇分から始まり、夜九時過ぎ頃に終了するという感じでした。少人数での演習がメインとなりますので、入学当初は教員との話し合いで演習の時間割を決定していききました。

その結果、二年間で終了するために、一年目には隔週で週二・三日のペースで大学に登校することになり、入学前に想像していたよりも気軽に通えました。

大学院に入学してくる人は様々です。私が入学した当時は、学部からそのまま進学した方以外にも、公務員（国・都道府県・市町村それぞれ）、自治体の元首長、助産師、歯科衛生士、NPO団体関係者など、多様な職業の院生が在籍し、大学院の演習を通して学びあうことができました。

各分野ならではの知識や現実に直面している課題などについての情報を得たり、



大学院で飲み会～その後大学院で宿泊

自分の職場には無い斬新な視点から物事を考えたりと、役所というムラ社会の中においての生活には無い、新鮮な経験をすることができました。これが大学院生活の醍醐味でもあります。

もちろん、社会人とはいえ学生ですから院生同士での飲み会も何回かやりました。大学の構内で飲み会をやった時にそのまま大学院に宿泊し、翌朝は大学院から県庁へ出勤した（！）ということも何度かありました。今となつては楽しい思い出です。

仕事と大学院のバランスのポイント

自治体から大学院に派遣される形での「研修」とは違い、自費で入学した社会人大学院生にとって重要なのは、言うまでも無く日常の仕事と大学院のバランスです。しかも、どんなにバランスを取ろうと工夫していても、どちらかを優先させないといけない場面に必ず遭遇します。

大事な授業がある日には残業をせずに仕事を切り上げることもありましたが、修士論文の執筆が佳境に入った時は有給休暇を取って執筆に専念したこともありました。

しかし、それ以上に仕事を優先しなければならぬ時期が何度もありました。職場内の年度途中での欠員で仕事が多忙となり、深夜までの超過勤務が連日続

いた時などは、やむなく大学院を辞めようかと何度か思ったことがあります。

その時は、なぜ自費で授業料を払ってまで大学院に入学したのか、という問いかけを自分自身にし、「自治体職員としてもっと視野を広げ、自治体の現実問題に対する分析・研究を行いたい」という気持ちで大切にしました。そして、「忙しい時は仕事を優先するのは仕方ない。でも大学院は退学しない」という決意をしたことが、苦しい時を乗り越えたポイントだと思っています。

職務研修としての 大学院入学との違い

ところで、都道府県職員や政令指定都市の職員ですと、職員研修の一環として政策研究大学院大学（東京都港区）に行き、一年間のプログラムを受けて自治体に戻ってくるという公募の研修があります。研修ですから、仕事を一時的に休んで有給で大学院へ行けるという待遇です。

しかしながら、あくまで職務の一環としての研修ですから、自分がやりたいというテーマを必ず研究できるわけではなく、常に自分の自治体から研修の状況の報告を求められる立場に置かれ、少なくとも名目上は、自分の自治体の職員研修の担当課にとって都合のよいテーマ

で研究をすることになります。そこにもどかしさを感じる方もいるようです。

結局は自分の研究スタイルをどうするのかという点と、大学院入学に何を求めるのか、という点から大学院を決めていった方がよさそうです。

大学院生活の経費について

社会人で入学する者として気になるのは、入学金や授業料などの経費についてです。

私は大学院在学中や現在も独身であるということもあり、ボナナスをそのまま授業料等に充てていたというのが現状でした。実際、私の場合、二年間で約一五〇万円かかりました。結婚して家庭を築いている方が入学される場合には、ライフプラン上、かなりの出費となることが予想されます。

よって、子供の教育費と重なる場合等に自身の大学院入学を計画する場合に、共済組合からの教育貸付（入学貸付・修学貸付）等の利用も視野に入れて、綿密なライフプランを事前に立てる必要があるでしょう。

乗用車一台が買えるくらいの資金を、自身の教育費に使う価値があるのかどうか、という議論はあると思います。ですから結局は人それぞれの考え方によるものと思います。

修士論文を書き上げるまで

大学院では、日々の授業の出席は大事ですが、それ以上に、執筆する修士論文の内容の良し悪しがとても大事です。

社会人大学院生だからと言って、修士論文を書く時間が無いという言い訳はあまりよろしくありません。

私の通っていた大学院の制度上、社会人に限っては通常二年の在学期間を更に一〜三年延長することができたのですが、私はその制度を利用せずに二年で修了しました。

実際、修士論文を執筆し始めるのには相当の決心が必要です。普段、学術的な文章を書く機会はありませんから、どのように書き進めていけばよいのかという問題がまずありました。そして、どのような書き方をすればよいのか、という問題がありました。

前者に関しては、自分のテーマに沿った論文の構成や章立てを早めに設計することで、執筆に取り掛かりやすい状況をつくる必要がありました。論文の構成は二年目の春頃にだいたい固めました。

後者に関しては、過去の大学院修士生の修士論文を参考にして、少しずつ書けるところから書き始めていくしかありません。指導教員からは、入学当初から「全体の体裁は後で修正することとして、どんどん書き進めていきなさい」と言わ



学位記授与式の時の筆者

れ、焦りながらようやく計画的に執筆し始めたのは二年目の初夏の頃でした。

それ以降、夏から初冬にかけては、仕事を終えて帰宅してからずっと執筆の日々でした。執筆が軌道に乗ると、就寝時刻が深夜二時になることもありました。仕事と両立させるためにはそれは仕方が無かったのです。

確かにその当時はハードな生活でしたが、それほど苦しいとは思いませんでした。それよりも、修士論文の執筆を通して自分が研究・主張したいことを表現できる、という気持ち良さを得ることができました。

また、修士論文の執筆に必要な情報を収集するために、とある村の役場に行

ってインタビュー調査を実施してきました。このようなフィールドワークで、普段の職場で勤務している自分ではない、研究者としての活動をしている自分を見つけることができ、労働とは違った生き甲斐としてのライフワークの大切さを痛感した次第です。

そして、二年目の一月上旬に完成、指導教員からのアドヴァイスを受けて加筆修正し、翌年一月に大学院に論文を提出することができました。

完成までには並々ならぬ時間や労力が注ぎ込まれましたが、修士論文を執筆することにより、自分が普段抱えている行政への問題意識や解決への道筋についてじっくり向き合うことができ、自治体職員としての生き方にプラスになったと今では感慨深く思っています。

大学院修了後について

そういうわけで、苦しさ楽しさがどちらもあった大学院生活ですが、あつという間に二年間が過ぎ、二〇一〇年三月に修了しました。

仕事との兼ね合いで苦労したものの、修士論文を完成させたという達成感もあり、「大学院に来てよかった」というのが私の感想です。

しかし大学院を出たからと言って、私にとつてはそれが終着点ではありません。大学院で培った知識や人脈（教員や院生のつながり）をこれからどう社会に役立てていくのか、という実践が大事だからです。

大学院在学時には必須であった、福島市内で月一回開催している「自治体政策研究会」（福島県とその近郊の自治体職員有志の勉強会）への参加は、大学院修了後も続けています。このことにより、自分の仕事を振り返ったり、最近の自治体の動向に関心を持ったりするいい機会になっています。

また、自治体に関係する学会に入会してみたり、機会があるごとに、自治体政策や地方分権をテーマにした原稿を書いてみたりしながら、ライフワークとしてこれからも自治体をテーマにした研究は続けるつもりです。

これからの自治体職員を取り巻く情勢

さて、せっかくなので私の研究テーマであった地方分権改革という視点から、自治体職員の今後の方向性をお話したいと思います。

このほど、内閣府に「地域主権戦略会議」という組織ができたように、地方と国に関する議論がますます盛んになさ

れ、地方自治体の制度が大きく変わっていかかもしれません。

そもそも、地方分権改革という動きは一九九〇年代前半から行われ、二〇〇〇年には今まであった機関委任事務が廃止され、通達も併せて廃止となりました。

これによつて自治体職員の事務も自由度が高まり、今までできなかった事務も住民のニーズに合わせて自由にできるといふ大きな変化が起こるはずだったので、実際には大きく変わりはしませんでした。

その原因は自治体職員の意識が変わらないからだ、と言う人もいます。また、地方分権の制度設計に問題があったのだ、と言う人もいます。

そんな背景もあつて、地方分権改革は「地域主権」という言葉とともに、その意義が強く問われていくでしょう。

一方で、自治体職員は、財政難を背景とした行政改革による職員の人員削減に伴い、相対的に一人当たりの業務量が増加していつています。ですから、どうしても日々の業務をこなすだけで精一杯であるという状況になりがちです。

このように、自治体職員を取り巻く情勢はシビアで、他方で住民からの期待は高まってきています。かなりの頻度で、いかにして自治体職員は地域に役立つべきか、というテーマに向き合わざるを得ないのです。

自治体職員としてのこれから

しかしながら、そういった時こそ、自治体職員のスキルアップやモチベーション向上に努めることが大事ではないのかと私は考えます。

私自身は、大学院に通うことで自治体職員としての意識が向上したと思っています。なにより、自分が勤務する自治体の各種政策の中身に敏感になりました。また、総務省をはじめとした国の動き（予算・補助金等以外でも）も常にチェックしています。こういったことは自分にとって大きな変化だと思います。

私は大学院等の大学機関等への入学を、無闇やたらに他の人に勧めたいとは思いません。日頃の仕事に問題意識を持ち、積極的に学びたい人が自発的に行くものだと考えるからです。ただ、少しでもキャリアアップを考えている人がいれ



筆者がお世話になっているヘアサロン

ば、進学という選択肢があるということを知っていてほしいなと思います。

これからは私は、大学院生活を通じて習得した、職場と自宅の往復では見つけられない、地域に根ざした「発見」（地域のニーズや課題）を探していこうと思っています。案外、視点を変えれば、自治体職員にとつて参考になる人やモノは身近にあります。

例えば、私は「SUNZ（サンズ）」という福島市のヘアサロンに定期的に行くのですが、様々なお客さんとコミュニケーションが取れ、話題が豊富な二五歳のオーナー兼スタイリストさん（二四歳で独立して店を経営！）にはいつも感心させられます。

そして、こういう人が自治体職員だったら地域をどう活性化できるか、などと考えると、自治体のサービスや地域の公共政策といった深いテーマにつながります。理・美容師と自治体職員ではイメージが大きくかけ離れていますが、同じサービス業として学ぶべきことは多いのです。

そんな感じで、自分が体験した大学院生活を通して、職場と違う環境で物事を考えるということがとても大切であることを、これからも伝えていきたいと思っています。